

図書館だより

' 9 1 . 1

一つになった故国

Sr. Maria Clemens

10月3日零時に、ヴァイツゼッカー大統領が東西ドイツの統一を宣言したとき、私もテレビの前で一瞬遠い距離を忘れて、ベルリンに集まっている大勢の人たちといっしょに、感激、感激、喜びにあふれて歌いました。

28年前、人間の自由をまったく無視する思想によって作られた不動の壁、暴力によって一つの国を38年間二つに分けてしまった鉄のばら線、たくさんの人々の血に染められた北ドイツから南までの死の境界線、これらすべては一年前にまだ恐ろしい現実でした。

一年前の今頃、私はドイツのヘルフォートの修道院にいました。11月10日の朝、いつものよ



目	次
一つになった故国 Sr. Maria Clemens 1	ケンブリッジの図書館より 4
本の紹介 めぐみの罪しあわせな狂気 ラーゲルレーヴの作品 3	調査・案内カウンターから 5
	貸出カウンター・うちあけ話 7

うに朝7時に食堂に入ったら誰もいませんでした。不思議なことに、みんなが近くのテレビの部屋に集まっていた。看護婦さんたちもシスターたちもテレビの前に釘付けになって、言葉もなく画面に写し出されたベルリンの壁に見入っていました。よく見ると、絶対に近づいていけないはずの壁のそばに人の姿が見えて、下に「いよいよ壁の崩壊」という字が大きく写されていました。9日の晩のニュースを見なかった私には全くわけがわかりませんでした。東ドイツ生まれのお年寄りのシスター・トマサが突然小さな声で「奇跡です！私の故郷を救ったのはマリア様です」と涙を浮かべてロザリオを祈り始めました。彼女は長い間、兄弟が生きているかどうか、生きていれどどこに住んでいるのかを知らないで、この日を持っていました。

「信じられない！」「奇跡です！」とあの頃逢う人逢う人に言われましたが、壁が崩れ始めたことは次の日曜日の朝に確認できました。病院の向かいの大きなお店のウィンドーにはおいしいパンやケーキ、チョコレートなどがたくさん並んでいました。突然聞き慣れていない車の音が近づいて来たので窓から外を見ると、ちょうど4台の車が黒い煙をはきながらお菓子屋さんの前に止まりました。乗っていた15人の東ドイツの人たちがメルヘンの世界に来たようにじっと飾り棚を眺めていました。すると、そのお店のおばさん、おじさん、家族みんなが出て来て、東ドイツの人たちを中へ招き入れました。そして、一人一人にお皿を渡しながらか、欲しいものを食べられるだけ自由にとるように勧めました。おいしいコーヒーを飲み終わった頃、彼らの喜びと感動のこもった歌声が病院まで明るく響きました。

その後まもなく、いよいよ西ドイツの人たちにも東への門が開かれました。前の日はほとんど一日中、国務大臣の西ドイツ国民への〈注意〉が放送されました。「……東ドイツのあらゆる不便さ、交通機関、道路などについて忍耐もつ

て傷つけることのないようにしてください。お弁当を持って行ってください。東ドイツの人たちにさえ足りない食糧を買い上げないでください……」などでした。長い車の列が東へと動いていましたが、国境の通過点では東ドイツの人たちが西ドイツの兄弟を熱いソーセージ入りのパンを渡しながらいきました。

壁の崩壊から一年も経たずにドイツ統一が完成されました。最初の感激は冷めて、国民全体が今厳しい現実に直面しています。旧西ドイツにとって、東が同じレベルに持ち直るまでの援助はちょっとしたことではありません。一方、旧東ドイツ人にとって、自由社会への突然の変化は当然いろいろな困難をもたらします。

「経済問題は3・4年の間に解決できるでしょうが、心の一致は国民一人一人の努力にかかっています。」とコール首相が統一前夜の演説の中で言っています。これからもたくさんの犠牲が要求されるでしょうが、自由になるためにはどんな犠牲も大きすぎることはありません。

☆ 東西ドイツ関係の本が図書館に入りました

- ・『ベルリンの壁崩壊 フォト・ドキュメント 1989.11.9』 アンケ・シュヴァルタウ他著
- ・『"壁"崩壊後の世界 大転換期、90年代のシナリオ』 磯村尚徳、NHK取材班
- ・『ドイツが一つになる 統一問題と欧州新時代 西独ボンからの報告』 仲井斌著
- ・『いま、ヨーロッパで何が起きているのか 欧州統合と東西ドイツの選択』 副島豊次郎著
- ・『ベルリン 1989』 東ドイツの民主化を記録する会編
- ・『ベルリンの壁崩れる 移りゆくヨーロッパ』 笹本駿二著 (岩波新書)
- ・『ベルリンの壁 天使たちの記録』 ヘルマン・ヴァルデンブルク著

本の紹介

めぐみの罪しあわせな狂気 ラーゲルレーヴの作品

絵本などで*『ニルスのおしぎな旅』を眺めた人は多いでしょう。あの子、いたずらのばちが当って小人にされ、ガチョウと旅をするあの男の子の話です。作者のセルマ・ラーゲルレーヴは、スウェーデンの女流作家ですが、日本ではあまり知られていません。少しふれて見ます。



『へいしのなみだ』より

『馭者』（死神の）はジュリアン・デュヴィヴィエが映画化して、*『幻の馬車』の名で知られ、邦訳もそうなっています。主人公のならず者ダビッド、その彼を心から愛して回心を願い、愛情を深くひめて死の床にある救世軍女兵士エーディト、このふたりには神秘的な心の交わりがあります。幻の馬車の馭者は作品の中で、大いなる御者の存在を暗示する役割を持ち、また読む人を幻想に引き入れるのです。

*『ポルトガリヤの皇帝さん』は、家を捨て、都会へ出た娘を嘆き、棧橋で待ち続け頭がおかしくなる父親のヤン。彼は自分をポルトガルの皇帝と思って、そう振る舞います。待ち続けた果に帰った娘は、しかし昔の娘ではない。皇帝の死によって娘の魂は救われます。

*『沼の家の娘』妻のある男と過ちを犯して、子を産んだ貧農の娘ヘルガは、子の養育の裁判で相手の男の偽証をとめようと、聖書を奪って宣誓をさせない。問いたゞす裁判長に「子供の父親です。偽誓の罪を犯させたくない。」と答えて訴えを取り下げ、希望も養育費も失います。この書き出しは圧巻で、裁判長の涙は共感を呼びます。ヘルガは罪を見に来た人に信仰を見せたのです。彼女はその後の生活と自己犠牲で、失われた名誉と思いがけぬ幸福を得ます。

*『アーネ師の室』では、田舎の牧師館でアーネ師と家族が殺され、ひとり生き残った少女エリサリルが語られます。少女は、復讐の使命を帯びて地をさまよう姉の霊のため、愛する男と自分と二つの生命を捨てるのです。

ラーゲルレーヴは、その作品に神への愛と信仰を描き、エーディトやヘルガ、エリサリルそして『地主の家の物語』のイングリットなど、多くの女性に善意そのものの生涯を歩ませます。それは無私とか寛容とか呼ばれますが、逆に見ると重くて辛いもの、心が裂け血が流れます。作者はその中で、無私への愛が深い美しさに輝くとき、永遠を刻む心を読む人に示すのでしょう。

処女作『ゲスタ・ベルリングの伝説』以来、北歐のきびしい風土と民族を、強い郷土愛を注いで書き続けます。強<グ>イングマル偉<イ>イングマルや、大力<グ>イワ<イ>イングマルなど、一族みながイングマルを名のるイングマルソン一族の、信仰のみを目的とした移住と、数多い困難や人間関係をテーマにした大作『エルサレム』。イエズス・キリストの生涯を下絵にした、『キリスト伝説集』などに、また多くの短編にそれが見られます。

ラーゲルレーヴが好んで用いた幻想や狂気、そして霊がとても自然なのは、この風土と民族に対する彼女のまなざしによるのでしょう。

ラーゲルレーヴは、1909年にノーベル賞を受けています。女性の最初の受賞、またスウェーデンが自国の作家に捧げた最初の文学賞であります。晩年に文想ともに盡き、空しく見える歳月に耐えたことも、作中の女性と似ています。

なお図書館には、絵本になった『ともしび』と『へいしのなみだ』もあります。 (S)

*印は図書館にあります。

著者名で目録をさがす時には Lagerlöf, Selmaを見て下さい。



ケンブリッジの図書館より

吉川 弘一 (英文学)

ケンブリッジの街の中心には、街の名の由来でもあるケム川という小さな川が流れていて、King's Collegeをはじめとして有名なカレッジは、その川に沿って南北に並んでいる。そしてケム川をはさんで裏手には文字通りBacksと呼ばれる緑の空間が広がっていて、そこから眺めるカレッジが、ケンブリッジでは最も美しい風景とされている。しかし目を反対の方向、西に転じると、こんもりとした木立の上から、University Libraryの高い塔が頭をのぞかせているのが見える。

ケンブリッジの大学図書館は建てられたのが1930年代、というから、300年、400年の歴史を持つ建造物が随所に見られるこの街の中では、比較にならない程新しい建物と言える。しかし、King's College, St. John's College, Trinity College等が、一箇所に集中しているせいか、と

もすれば装飾過多のごたごたした印象を与えがちなのに対して、大学図書館は、ひとり離れた所に、すっきりとした完璧な左右対称の優美さを誇って立っているように見える。狭い敷地に最大限のキャパシティを、という設計方針の



日本のずんぐりとした図書館を見慣れた者にとっては、この建物はあまりにもスマートで、ぜいたくで、また中央の塔(156ft.)は幾分威圧的にさえ映るかも知れない。しかし、チャペルでもない、書庫でもない、ましてや見張り台では

もちろんない、一体何に使われているのか全く謎の、このそびえ立つ塔は少なくとも、学問の府ケンブリッジの巨大なmemory bankとしての誇りを象徴していることだけは確かなようである。

「英国で出版される全ての出版物を所蔵する資格を持った5つの図書館のうちのひとつ」というから、その蔵書数は膨大なものになるはずだが、建物の内部は広々と、ゆったりとした造りになっていて、南北の両翼には中庭さえある。その7階建ての両翼を書庫が占め(それぞれFrontとWingに分かれている)、中央の棟は、奥に向かってCatalogues Room, Main Reading room, 更に雑誌類が置かれたWest Roomと続く。その他Manuscripts Room, Rare Books Room, Music Departmentといった特殊な部屋は建物の裏手に並ぶ配置となっている。

Catalogues Roomでは、左右の壁にぎっしりABC順に並んだ巨大な目録が壮观だ。中央にはずらりと20台以上のコンピュータ一端末機が置かれてあり、1978年以降の出版物は、誰れもがそのキーをたたいて検索出来るようになってい

る。

この部屋で調べ出した分類番号に従って、利用者は自由に両翼の書庫の中をさまようことが出来る。そしてようやく探し当てた本は、図書館内ならどこでも読める。Main Reading Room

(カット・新座かをる)

はもちろんのこと、書庫の机、或は廊下に並んだ大きな机も結構利用されている。

英文学関係はNorth Wing 4th Floorに集中しているので、自然とその長い机の一角に陣取って本を読むようになった。人の出入りは意外と激しく、また、書庫は所詮書庫、という考えがあるのか、通り過ぎる足音、おしゃべりも結構うるさい。しかし、いつも込んでいる Main Reading Roomで隣りや向いの人の気配を気にしながら息を殺して読むよりは、窓に向かって自然の光のもとで読む方がずっと気が楽だ。

時々疲れて窓の外を見やると、美しい緑の風景が広がっている。タバコが吸いたくなれば、Ground FloorのTea Roomまで降りて行って、コーヒーを飲みながら一服する。この文章を書いている今(10月)は7時15分閉館だが、春から初夏にかけては夜の10時まで開いていた。イギリスのmidsummerの頃はやはり、5時から8時までが、いつ暮れるとも知れない" a little eternity" (ヘンリー・ジェイムズ) だった。これから迎

えるであろう暗い冬の図書館もまた、一年限りの滞在者にとっては、懐かしい思い出になるのかも知れない。

最後に余談を。この図書館には、18世紀の小説家Sterneに関する貴重な文献がOates Collectionとして収められている。寄贈者のOates氏は、何とここに勤める一介の図書館員であった。Sterneの魅力に取りつかれた彼は、閉館後、書庫の中のSterne関係の文献を読み耽けることに飽き足らなくなり、とうとう自らの立場を利用して、古本屋から安くこれらの文献を少しずつ買い集めていったという。そして退職後一切を寄贈したのが、このOates Collectionである。ひょっとしたら今も、第二、第三のOates氏が夜な夜な書庫の中をさまよって自らの趣味に耽けているのかも、と想像するのもまた楽しい。

☆吉川先生は現在イギリスで
研修中です。ご多忙の中、お
便りと写真をお願いしました。
ありがとうございました。



<調査・案内カウンターから>

調査・案内カウンターは、貸出カウンターの隣にあります。貸出カウンターは本の貸出でおなじみですが調査・案内カウンターは何をしているのか知らない方が多い・・・との声があり今回PRをさせていただくことになりました。調査・案内カウンターはその名のとおり調査・案内を担当するカウンターで、皆さんが特定の図書や論文をさがしたり、あるテーマについてどんな資料があるかを見つける方法など、必要とする文献や情報をさがすお手伝いをしています。

さがしている資料が見つけれない時には調査・案内カウンターに相談してください。この場合図書館の利用に慣れていなくてさがせなかった、「環境問題についての入門書」など特定の資料でなく同主題のものがあればよい、文学作品の研究論文の場合のように雑誌に掲載された論文がその研究者の著作集あるいは他の資料集などに収録されているなど図書館で見つけだせる場合があります。

皆さんの必要な資料が当図書館にない場合もあります。図書館にないことが判明しましたら、出版中の物でしたら購入希望図書として申込み、図書館の蔵書にしてもらうという方法があります。この場合は利用できるまでかなりの時間を見ていただかなければなりません。もう1つは他の図書館を利用する方法です。図書館間には相互利用ネットワークがあり、足りない資料を提供し合う相

互協力を行なっています。

この時、必要となるのが書誌事項の確認です。図書の場合は、書名、著者名、出版社、出版年、雑誌論文の場合は、雑誌名、巻(号)数、掲載ページ、著者名、論題です。できましたらその文献の載っていた資料をカウンターにお持ち下さい。この書誌事項をもとに、まずさがしている資料がどこの図書館にあるかを調べます。国立国会図書館、道立図書館をはじめ、他大学図書館の蔵書目録や総合目録などを使って所蔵館を調べることができます。

このようにして所蔵館がわかったら、資料を入手するには次の2つの方法があります。

札幌近郊の図書館でしたら、自分で直接行って資料を見ることができます。市立図書館などの公共図書館は個人の資格で利用できます。大学図書館の多くは一般公開をしておりませんので、他大学の図書館を直接利用したいときは、当図書館発行の利用依頼状を持参しなければなりません。利用依頼状は調査・案内カウンターにお申し込み下さい。

遠隔地など自分で行けない場合は、図書館を通して文献複写を依頼したり、資料を借りたりすることができます。このときも調査・案内カウンターにお申し込み下さい。

資料の一部の複写でよい場合は複写依頼、資料全体を見たいときには貸借依頼をします。費用(通信費・複写料金・送料など)は利用者の負担となります。

資料によっては、目録などで見つけられずその所在確認に時間がかかったり、依頼先の都合により、思わぬ時間がかかることがあります。複写依頼の場合国内の図書館でも1ヶ月以上かかる場合があります。国外の場合は入手まで早くても1ヶ月から3ヶ月はかかります。卒論の準備のため11月に相談にきた方の探している文献が国内に所蔵がなく、卒論作成に間に合わず諦めた例があります。

レポートや卒業論文の資料集めは、なるべく早く、時間にゆとりを持って始めてください。

このほか、毎週火曜・木曜の午後にガイダンスをおこなっています。レポートや卒論準備のための資料のさがし方を案内しますので、ぜひご利用下さい。

'89年度の調査・案内カウンターの利用統計の一部を数字とグラフで表わすと次のようになります。

他図書館との相互協力件数

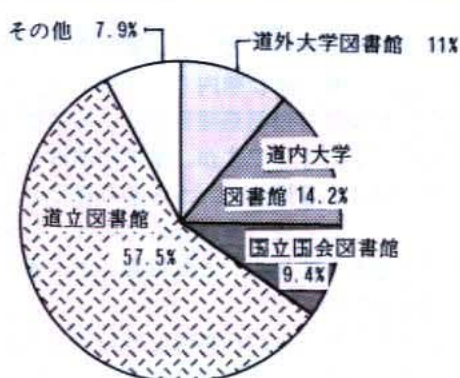
資料貸借	貸出	36 冊
	借受	111 冊
文献複写	受付	235 件
	依頼	249 件
直接利用	受付	44 件
	依頼	13 件

調査案内カウンターへの質問件数

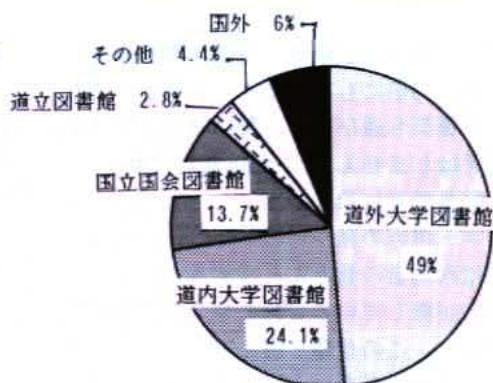
学生	414件	29.9%
教職員	503件	36.3%
学外	468件	33.8%
計	1385件	100%

貸借依頼では、道立図書館は資料に偏りがなく充実しており、週2度巡回車による配達があるため、1番多く依頼しています。道内に所蔵館がない場合は国立国会図書館に依頼することが多くなっています。最近では道外の大学図書館でも貸借依頼に応じてくれるところも増えてきており、複写では間に合わず現物を見たいという要望に応えられる機会が増えています。

複写依頼では最近国外に依頼することも増えてきました。1ヶ月程で入手できるBritish Library(イギリス)に依頼することが多くなっています。



'89年度貸借依頼先



'89年度文献複写依頼先



貸出カウンター・うちあけ話



どんなに天気が悪くても、館員は皆開館の40分前(8時20分)までに出勤します。学生だった頃よりも、早起しなればなりません。

朝の仕事はまず館内の清掃。これは公仕室の浦田さんがほとんどしていただきます。係はカウンターまわりの拭きそうじをしたり、新聞を当日の朝刊にとりかえて、皆さんの来館を待ちます。もうひとつ、開館前の大切な仕事に書架整齊があります。本が書架に記号通りに並んでいるか、毎日一冊一冊点検するのです。館内の全ての資料を整齊するのに一週間かかります。(使った本は、もとの場所にもどすよう協力してください。)寝起きの身体にこの仕事はなか

なか大変です。立ったりしゃがんだりを何度もくり返しますので、突然立ちくらみがおそってくることもあり、意識がうすらいでいくのを棚板につかまって、両足をふんばってこらえます。

9時になって開館。図書館の仕事は座っていればいいから楽だとか、仕事に本がたくさん読めていいとかよく言われますが、決してそんなに楽ではありません。本学の図書館の貸出数は、全国の同じ規模の大学図書館と比較して、上位にランクされるほど利用が多いのです。貸出が多ければ返本も多く、本をもとの書架に戻しに行くのは、ブックトラック(荷台)にいっぱい積んで、一日平均5~7回はあるでしょうか。

新着書が入る日や、試験期、長期休暇前などには、それが2～3倍にもなります。本ばかりでなく、時には書架も運びます。腕に筋肉がつきますが、痩せはしません。(これは私だけかな?)とにかく図書館員は体力です。

カウンター担当の私たちにとって、いちばん楽しいのは利用者の皆さんと接することです。利用者の方が探している資料を見つけて喜んでいただけると、この仕事を選んで良かったと思います。ハブニングもいろいろあります。窓からとんぼや蝶が入って来るのはしょっちゅうですが、以前にすずめが入って来て外に出られなくなったこともあります。犬が入って来たこともあります。他大学の学生が、非常勤講師を装って、ちゃっかり本を持って帰ってしまったという大事件もあります。古いコピー機がオーバーヒートして煙を出したり、天井から水が漏ったりなどなど……だけど学生の皆さんから延滞金を徴収したり、貸出停止処分にするのはいやな仕事ですね。それと館内で騒がしくしたり、飲食したりしているところを注意するのも、お互いに後味の悪い思いがするものです。館員は利用者の方に、館内で気持ち良く過ごしてもらいたいと思っています。

午後4時半から(土曜日は2時から)、カウンターには、遅番の職員が一人だけになります。やがて、閉館時間になり皆さんが帰った後、消灯、戸締まり、日誌の集計、翌日の準備をします。ところで電灯のスイッチですが、閲覧室だけでも14ヶ所。書庫にいたっては、全ての書架に一ヶ所ずつ付いていて、館員になったばかりのころは、それがどこにあるのかなかなか覚えられなかったものです。

秋から冬にかけては、日が暮れるのが早いので、広くて真っ暗な館内で、カウンターの上だけ灯りをつけて残務処理をすることになります。めったにないことですが、すでに消灯した誰もいないはずの書庫から、うっかり寝すごした人がスーッと出て来たり、なんていうことも無いわけではありません。どれ程驚くか、想像してみてください。

もちろん私たちの仕事はこういうことばかりではありません。楽しいことも、たいへんなこともいろいろありますが、時々司書の資格を取りたいという学生さんがいらっしゃるのは、うれしいですね。資格は在学中に、通信教育などで取得することができます。カウンターに資料がありますので、興味がある方は見に来てください。

最近はこの図書館でもコンピューター化されてきています。一見地味なようで、意外と時代の最先端にある職場ではないかと思っている。今日このごろであります。

編集後記

★図書館だよりをワープロで打ちだしてから5年目。今回初めてフロッピーで原稿をもらいました。藤の図書館も短期間で機械化が進み、心臓が悪くなる様な体験をしています。☆ようやくできました38号。“読まなきゃ損”と思ってくださる方もいることを知り、次号につなげる気力を呼び起こしています。これからも図書館だよりを“77”3077